



日本イスパニヤ学会

Asociación Japonesa de Hispanistas

会報第 11 号 / Boletín Núm. 11

2007 年 2 月 10 日 / 10 de febrero de 2007

事務局

〒170-0004 東京都豊島区北大塚 3-21-10

7-バス大塚 3F (株) ガリレオ

学会業務情報化センター 東京オフィス内

Tel:03-5907-3750 Fax:03-5907-6364

e-mail:g004esp.mng@galileo.co.jp

ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/ajh/>

編集部

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

東京大学教養学部スペイン語部会

竹村文彦研究室 Tel:03-5454-6437

e-mail:takemura@ask.c.u-tokyo.ac.jp

巻頭言

野谷 文昭 (早稲田大学教授)

しばらく前のことになるが、学会理事に選ばれ、「イスパニカ」の編集委員長を 4 期務めた。原稿が集まり、印刷所とやりとりし、やがて編集後記を書くときがくる。するとこんな疑問が湧いたことを思い出す。こうして学会誌の編集が終り、じきに発行される。だが、それがどういう意味を持つのか。つまり本誌の存在意義を自明のものできず、あれこれ考えてしまうのだ。掲載されるのはいずれも真剣に書かれた論文であり、査読によって評価もされている。しかし、それらは一体誰に向けて書かれているのだろうか。そもそも書き手は読者を意識しているのか。意識しているなら、どんな読者を想定しているのだろうか。これは自分が携わる編集という行為にある種の意義を見出すことで、結局は自分自身の存在意義を確認したいという欲求から生まれる疑問なのかもしれない。

それからこうも考えた。執筆者は時代を意識しているだろうか。本誌は時代の空気を吸っているか。奥付を取ってしまったとき、どんな時代に発行されたか分かるだろうか。果たして時代を先取りしている文章はあるか。あるいは過去を今の目で再評価している論文はあるか、と。これは歴史というレベルに関わる問題である。

編集に携わっていた時期に 9.11 事件とイラク開戦という事件が起きたことが、筆者に歴史を普段にも増して意識させた原因のひとつであることは間違いない。21 世紀に対する楽観を一挙に吹き飛ばしてしまった破壊行為の連続は、グローバル化によってきしみ出した世界の空気をさらにぎすぎすしたものに変えてしまった。スペインでアスナール政権が敗北したのは、バスク問題とイスラム原理主義の問題をすり替えようとしたことに対する国民の反発によるところが大きい。その背後には、これ以上世界を険悪な空気で覆いたくないという気持ちが国民の間にあったのではないか。もちろんイスラム世界と重なり合ったり、対峙し合ったりしてきたイベリアの地政学的要因も影響しているだろう。さらにスペインは内戦問題とともに長年バスク問題を抱えてきた。そこには寛容と不寛容というテーマが絶えず存在する。いずれにせよ重要なのは、一指導者のアジェンダに乗るのではなく、国民が主体的に選択するという姿勢である。

後記を書くとき、そんなことが頭の中を駆け巡る。言うまでもなく、それは多分当学会の扱う範囲を越えている。先日、スペイン史学会と早稲田大学地中海研究所共催のスペイン内戦勃発 40 周年記念のシンポジウムがあったが、2006 年のイスパニヤ学会の大会にこのテーマを扱うパネルはなかった。それは既に戦後は終わったと考えるからなのか、学問領域が違うと考えるからなのか、研究者がいらないからなのか。

今や大学の中で人文科学は崩壊の危機に瀕しているという認識が一般化し、人文系の学部、学科の新設や再編が進んでいることは周知の通りだ。当学会に属する研究者の多くはなんらかの形で大学に属し、そうした動きを肌身で感じているはずである。そんな中で、当学会をオアシスと捉えるのか、実は荒波にもまれている小舟であると捉えるのか、両者の認識の差は大きい。同志社大学での大会で、外部から講演者を招いてシンポジウムを開催した背後に後者の認識があったとすれば、それは自己充足的世界から抜け出ようとする試みとして評価されていいだろうと、かつて同様のことを試みたものとして思う。当然異論はあるだろうが、時代の空気を吸うことは、少なくとも思考停止を防ぐからである。

スペインでの偶想 ―書物をめぐって―

清水 憲男（上智大学教授）

一年間のスペイン滞在も、手をこまねいているうちに終盤に入ってしまい焦燥感に苛まれるばかりの昨今だが、それでもこちらに長期滞在をしていると、雑事に追われる日本では日頃あまり考えないことを着想できたり、回想したりすることがある。学問的な回想をするには自分の学はあまりに未熟すぎ、またその年齢にはかろうじて若すぎる（？）と任じているので、原稿執筆のお招きに、簡単な「思い出」を少し書くことでお茶を濁させていただきたい。

研究を志し、文字通り曲がりなりにもその道を歩いてふと立ち止まったとき、その節々で（その時点では気づかなかったにせよ）自分の将来を左右するような書物に遭遇することがあるように思えてならない。大学に入学して間もなく読んだ文化人類学者・石田英一郎の一連の著作に学問の厳しさを教えられ、インド思想の中村元の『比較思想論』（岩波全書）に学問の恐ろしいまでの広がり可能性を示唆された。なお、私が外国にある程度長期滞在する場合、中村元の『東洋人の思维方法』（全 4 巻、春秋社）は必携書となっており、今回の滞在でもこれを座右の書としている。

大学院修士に入ってから偶然手にして衝撃を受けたのは、当時まだほとんど無名の青年だった Francisco Rico の *El pequeño mundo del hombre* だった。私が本書の内容を当時のくらい理解したかははなはだ心もとないのだが、スペインに途方もない学者がいることを思い知らされ、Rico のものは今後すべて読み尽くそうとまで決意したことを覚えている。もちろん当時は現在の増改訂版ではなく、Castalia の版だった。修士を終えてスペインに留学するまでの間隙を利用して読んで衝撃を受けたのが Claudio Guillén の *Literature as System* (1971, Princeton U.P.) で、当然ながら中村元とはまったく異なった視座からではあるが、あらためて比較論の可能性を教えられた。現在、こちらで折にふれ

て同著者の近著 *Entre lo uno y lo otro* (2005, Tusquets)を繙いて教えられたり、著者に頻繁にお目にかかって指導を仰いだり、歓談を楽しませていただいている。

こちらの博士課程に進んでからは、書物以上に今は亡き恩師に圧倒的な影響を受けたのだが、それに関しては別の機会に少しく書かせていただいたことがあるだけでなく、際限がなくなるのでやめておこう。

そしていつの間にか現在こちらの大学で毎週3コマ、比較文学の集中講義を担当させられ、日頃の勉強不足がたたって自転車操業で四苦八苦している。今あらためて思うのは、どうやら自分はよほど鈍感で、書物の消化に非常識なまでに時間がかかってしまうタイプであることだ。中村元、Claudio Guillénなどの著書に接してから優に30年以上も経過してから、比較論をスペイン人学生相手にようやく、しかも危うい足取りで始めている。いくらなんでも遅すぎるとの忸怩たる思いを痛感しつつも、ほぼ諦めの境地で、真の読書は読了してからゆっくりと沈殿していった、他の多くの書物が何ごとにもなかったかのように水流に押されて過ぎ去ってゆくのに対し、水面からしっかり顔を出さないまでも、いつしか水面から微かに垣間見える程度にまでは近づいてきてくれる・・・ずいぶん身勝手な解釈、自己正当化を試みつつ、本格化する寒さの中で今日も次回の講義の予習に迫られている。

バルタサル・グラシアン賞受賞のご報告

日本イスパニヤ学会は、グラシアン基金（グラシアン基金事務局長アントニオ・ルイズ・ティノコ氏）より、2006年度バルタサル・グラシアン賞（副賞50万円）を受賞した旨の連絡を、12月13日付で受けました。授賞式の詳細については、スペイン文化省、スペイン大使館との協議の上、連絡をいただけることになっております。

受賞の対象になった理由は、従来の方針に加え、2006年度より、日本におけるスペイン語とスペイン文化の紹介・普及に功績のあった個人・団体を表彰の対象に含めることになったからとのことであります。50年有余に亘る当学会の活動が高く評価されたこと欣快に存じます。

（会長 高橋覚二）

日本イスパニヤ学会 2006 年度第 1 回理事会議事録

2006 年 5 月 21 日（日）13 時～16 時
名古屋ターミナルビル 8 階 A2 会議室

出席：稲本健二、片倉充造、川上茂信、佐藤邦彦、杉山晃、高垣敏博、高橋覚二、
竹村文彦、田尻陽一、西川喬、宮本正美、三好準之助、柳原孝敦、山崎信三
（庶務委員：伊藤ゆかり、前田明美）（ガリレオ：山田淳一、林紘子）
欠席（委任状あり）：清水憲男（海外滞在のため本年度は欠席）、柳沼孝一郎

【報告事項】

特になし

【審議事項】

1) 議事録承認

2005 年 10 月 8 日第 3 回理事会議事録、及び同日 2005 年度総会議事録
第 3 回理事会議事録における「催促」を「督促」に訂正後、各議事録承認。

2) 役員、委員の選出

- (1) 会長：高橋覚二
- (2) 副会長：三好準之助
- (3) 会計委員：宮本正美
- (4) 機関紙 HISPÁNICA 編集委員会、委員長：田尻陽一（留任）
語学（2 名）：佐藤邦彦（新任）、西川喬（留任）
文学（2 名）：田尻陽一（留任）、柳原孝敦（新任）
文化（2 名）：稲本健二（新任）、柳沼孝一郎（留任）
- (5) 広報委員（会報）：川上茂信（新任）、竹村文彦（新任）、高橋覚二（新任）
- (6) 広報委員（HP）：高橋覚二
- (7) 監査：立林良一（新任）、寺崎英樹（留任）
- (8) 地域研究学会連絡協議会担当：柳沼孝一郎（留任）
- (9) 庶務委員：伊藤ゆかり、前田明美

3) 会員異動

- (1) 入会希望者を全員承認。
- (2) 退会者：BENAVIDES, JUAN M., SIMMONS, MARGARET

4) 今年度（2006 年度）大会について

大会委員長の稲本理事より以下の報告があった。

- (1) 日程：2006 年 10 月 21 日（土）、22 日（日）
- (2) 会場：同志社大学新町キャンパス（今出川キャンパスに隣接）
- (3) 記念行事：シンポジウムを計画中。次回理事会で詳細を報告、検討する。

内容を次号 HISPÁNICA に掲載したい。

また次が提案された。

(4) 実行委員：2名選出してはどうか。今後メールで連絡、検討する。

5) 機関誌 **HISPÁNICA** について

編集委員長の田尻理事より以下の報告があった。

- (1) 第 50 号原稿応募状況：論文計 15 本（言語 7 本、文学 5 本、文化 3 本）、研究ノート 2 本、書評 3 本の応募があった。論文は直ちに査読に入る。
- (2) 新入会員の扱いについて：入会申込みと同時に投稿するケースが見られる。新入会員については好意的に受け入れるものの、申込みと会費納入の兼ね合い等、今後入会承認前の投稿の扱いをどうするべきか。新投稿規定案を次回理事会に諮る旨承認された。
- (3) 予算の見積り：弘学社、ガリレオの紹介による出版社、メディアパックの三社から相見積りをとることとする。

高橋理事より次の報告があった。

- (4) 機関誌のウェブ閲覧：公的ウェブ閲覧サービスに昨年応募したが落選した。本年も引き続き応募している。

6) 会報、ホームページについて

- (1) 今後の方向性：機関誌が学会活動の記録であるのに対して、会報は会員の便宜を図る情報紙としての役割の違いを明確にするべきである。よって掲載内容や他の諸連絡の発送との兼ね合い等を検討し、最も合理的な発行回数と時期を決め、広報委員はこれを会長に報告することとする。
- (2) ホームページの基本的な管理はガリレオが行う。

7) 日本イスパニヤ学会奨励賞について

- (1) 田尻理事より、同賞の選考は理事会の委託を受けた編集委員会が担当する旨提案、承認された。
- (2) 佐藤理事より、第 9 条について「理事会の議決の後、議案として総会に諮る」旨の明記が提案され、今後検討することが確認された。

8) その他

(1) 会計について

- ①学会の資産状況が報告された。
- ②昨年度大会（神田外語大学）での会計報告は次回大会でなされる旨が確認された。
- ③角田前理事が、大会開催校と理事会の会計書式を統一する作業を進めている旨が報告された。

(2) **Asociación Asiática de Hispanistas** について

先方には組織立った活動は確認されていないことから、日本イスパニヤ学会としては関係を結ぶものではないことが確認された。ただし長期的展望に立ち、個人レベルでの交流は奨励される。

- (3) 理事会メーリングリストは、ガリレオを含むリストと理事のみのリストの双方を、ガリレオが作成する。
- (4) 次回理事会：本年 9 月 24 日（日）に開催する。

田尻理事の提案により、理事会規定を全員に配布する。

日本イスパニヤ学会 2006 年度第 2 回理事会議事録

2006 年 9 月 24 日（日）13 時～16 時
名古屋ターミナルビル 8 階 A2 会議室

出席：稲本健二、片倉充造、川上茂信、佐藤邦彦、杉山晃、高垣敏博、高橋覚二、
竹村文彦、西川喬、宮本正美、三好準之助、柳原孝敦、山崎信三
庶務委員：伊藤ゆかり、前田明美
欠席：田尻陽一、柳沼孝一郎（委任状あり）、清水憲男（委任状なし）

【報告事項】

特になし

【審議事項】

1. 議事録承認

2006 年 5 月 21 日第 1 回理事会議事録、及び 2006 年第 1 回理事会後 9 月 20 日現在までのメールによる臨時理事会審議議事録を承認。

2. 本年度（2006 年度）大会について

(1) シンポジウム：稲本理事の提案どおり承認された。

(2) 理事会：11 時より開催する。

(3) 研究発表：以下の点が承認された。

①プログラム案のセッション B2 と C2 を入れ替え、ネイティブのセッションと日本人のそれが偏らないようにする。

②各セッションの司会者は理事を中心に人選し、高橋会長より依頼する。またプログラムには各司会者の所属先を掲載する。

③研究発表を希望している新入会員の入会を承認する。

④今回の発表者は全員が会員ということになるが、今後入会申込みと同時に研究発表を希望する者については、大会開催前に年会費振込の期限を設け、それを守らない場合はプログラムに発表内容が掲載されていても発表は認めないという提案がなされた。次年度以降に適用するため今後審議する旨が確認された。

3. 機関誌 HISPÁNICA について

(1) 印刷所の決定：弘学社に決定する。見積もり額に大差はなく弘学社の方が若干安いし、あえて他社を選ぶ積極的理由はない。

(2) 投稿規定：修士論文について、公刊物とみなすか、未公刊物とみなすかをめぐり議論されたが、次回の理事会で継続審議することとなった。

(3) 第 50 号掲載論文の承認は(2)の審議が終了した後に行うことが確認された。

(4) 発送先、寄贈先は前年度に準ずる。

4. 奨励賞について

機関誌についての審議が継続中のため、今回の総会に諮ることはできない旨が確認された。

5. 会報（次号第 11 号）、HP について
次回理事会で審議する旨が確認された。
6. 会計報告案について
次回理事会で審議する旨が確認された。
7. 2007 年度予算案について
次回理事会で審議する旨が確認された。
8. 2006 年度総会議案について
次回理事会で審議する旨が確認された。なお次回大会開催校については、東日本地区より推薦、立候補を募ることが確認された。
9. その他
古い Yahoo メーリングリストは、メールによる臨時理事会審議の内容がすべて含まれているため、数年間保管することが確認された。

メールによる審議事項（2006 年 10 月 16 日現在）

1. 会員異動
入会希望者の手続きが完了した。
2. 今年度（2006 年度）大会について
(1) 10 月 6 日付で大会開催案内を発送した。
(2) 大会開催費用として 30 万円を同志社大学に拠出することが承認された。
3. 機関誌 HISPÁNICA について
修士論文の扱いについて数名の理事から意見が出され、引き続き審議することが確認された。
4. 会報について
巻頭言と書評 1 件は依頼済み、他に書評 1 件を依頼中である。さらに掲載すべき内容を募る旨の報告があった。
5. 会計について
ガリレオより 9 月 30 日現在の口座残高の報告があった。
みずほ銀行 252, 286 円
郵便局 5, 983, 080 円
6. 次回大会について
2007 年 10 月 27 日（土）、28 日（日）の日程で、清泉女子大学が開催要請を受諾した。

2006 年度 日本イスパニヤ学会第 52 回大会

期日：2005 年 10 月 21 日（土）・22 日（日）

会場：同志社大学 (<http://www.doshisha.ac.jp/japanese/>)

新町キャンパス 臨光館 2F・3F・4F

〒602-0047 京都市上京区新町通今出川上ル近衛殿表町 159-1 (Tel: 075-251-3180)

大会実行委員長：稲本 健二

10 月 21 日（土）：理事会・総会・シンポジウム・懇親会

（受付 3F／休憩室 3F R305／書籍展示 3F）

11:00～13:00 理事会（臨光館 2F R202）

13:30～14:30 総会（臨光館 2F R201）

15:00～17:00 シンポジウム（臨光館 3F R301）

「多言語文学への挑戦－変わりゆくスペイン語文学の領域」

・ゲスト・スピーカー

若島 正 氏（京都大学）

管啓次郎 氏（明治大学）

・コメンテーター

竹村文彦（東京大学）

柳原孝敦（東京外国語大学）

稲本健二（同志社大学）

・コーディネイター

松本健二（大阪外国語大学）

18:00～20:00 懇親会（京都ガーデンパレス）

詳細は <http://www.hotelgp-kyoto.com/> 参照

10 月 22 日（日）：研究発表

SESION A (9:30～11:00)

A-1：言語(Lingüística Hispánica)：臨光館 2F R207

司会＜宮本正美（神戸市外国語大学）＞

(1) 田林洋一（清泉女子大学大学院）

「スペイン語 E N の否定における概念構造の試案」

(2) 木越勉（東京外国語大学大学院）

「スペイン語名詞句内の形容詞の位置」

(3) 近藤由佳（大阪外国語大学大学院）

「cuando 節における叙法」

A-2：文化(Cultura Hispánica)：臨光館 2F R209

司会＜古家久世（京都外国語大学）＞

(1) 瀧本佳容子（慶應義塾大学）

- 「書記から年代記作者へー15世紀のカスティージャ王国官吏 F. デ・ブルガール」
- (2) 藤野雅子 (京都産業大学)
「スペインの昔話に見られる聖人の役割」
- (3) 田辺加恵 (大阪外国語大学)
「アルフォンソ 6 世のトレド再植民ーフエロ (都市法) から見たモサラベの処遇」

A-3 : 文学(Literatura Hispánica) : 臨光館 2F R211

司会<立林良一 (同志社大学) >

- (1) 太田靖子 (京都外国語大学)
「タブラーダの日本印象記『日の国にて』を読むータブラーダ来日の信憑性を探るー」
- (2) 大楠栄三 (静岡県立大学)
「パルド=バサンとクラリンーLa madre Naturaleza と La Regenta の書き出し」
- (3) 森直香 (京都外国語大学)
「フェデリコ・ガルシア・ロルカの『血の婚礼』における死生観に関する一考察」

SESSION B (11:30~12:30)

B-1 : 言語(Lingüística Hispánica)・文学(Literatura Hispánica)

: 臨光館 2F R207

司会<Arturo Escandón (立命館大学) >

- (1) Gerardo Villegas Muñoz (関西外国語大学)
"Los signos paralingüísticos de la comunicación no verbal: estudio de los elementos cuasi-léxicos en la conversación en español de hablantes japoneses"
- (2) Santiago Esparza Celorrio (関西外国語大学)
"La Literatura Chicana como literatura del tercer milenio"

B-2 : スペイン語教育(Enseñanza de la lengua española)

: 臨光館 2F R209

司会<西川喬 (神戸市外国語大学) >

- (1) 塚原信幸 (愛知県立大学)
「スペイン語教育における新しい遠隔通信技術の利用」
- (2) 和佐敦子 (大阪外国語大学)
「認知言語学的観点からの接続法習得」

B-3 : 文化(Cultura Hispánica) : 臨光館 2F R211

司会<坂東省次 (京都外国語大学) >

- (1) Lluís Valls Campà (京都外国語大学)
"Trabajadores Transfronterizos en Galicia y Norte de Portugal"
- (2) Darío González Ramírez (桃山学院大学)
"Música salonesca del siglo XIX: De la polca europea a la polca amerindica"

SESSION C (13:30~14:30)

C-1 : 言語(Lingüística Hispánica) : 臨光館 2F R207

司会<山崎信三 (立命館大学) >

(1) 豊丸敦子 (上智大学大学院)

「副詞と名詞句の語強勢の実現 上昇調イントネーションとの組み合わせの場合」

C-2 : スペイン語教育(Enseñanza de la lengua española)

: 臨光館 2F R209

司会<糸魚川美樹 (愛知県立大学) >

(1) Leticia Vicente Rasoamalala (愛知県立大学)

"Análisis Conversacional de la interacción en el aula como herramienta para el docente de ELE"

(2) 森本栄晴 (早稲田大学)

"Sobre la capacidad de distinguir entre las tres líquidas españolas de los hablantes japoneses"

LII CONGRESO DE LA ASOCIACIÓN JAPONESA DE HISPANISTAS

Fecha: 21, sábado y 22, domingo de octubre 2006

Lugar: Universidad DOSHISHA(<http://www.doshisha.ac.jp/japanese/>)

Campus SHINMACHI Edificio RINKÔKAN

602-0047 Konoeden Omote Machi 159-1, Shinmachi Dôri Imadegawa Agaru,

Kami-gyô Ku, Kyoto City, Kyoto, Japón (Tel: 075-251-3180)

Jefe del Comité Local: Kenji INAMOTO

21, sábado de octubre: Junta Directiva, Asamblea General, Simposio

(Recepción: Planta 3 / Sala de descanso: Planta 3, R305 / Exhibición de libros: Planta 3)

11:00~13:00 **Junta Directiva** (Edificio RINKÔKAN Planta 2, R202)

13:30~14:30 **Asamblea General**(Edificio RINKÔKAN Planta 2, R201)

15:00~17:00 **Simposio** (Edificio RINKÔKAN planta 3, R301)

Hacia la literatura plurilingüe -- Una literatura hispánica que trasciende de los marcos tradicionales

• Conferenciantes invitados

WAKASHIMA, Tadashi (Universidad de Kyoto)

SUGA, Keijiro(Universidad Meiji)

• Comentaristas

TAKEMURA, Fumihiko (Universidad de Tokyo)

YANAGIHARA, Takaatsu(Univ. de Estudios Extranjeros de Tokyo)

INAMOTO, Kenji (Universidad DOSHISHA)

• Coordinador

MATSUMOTO, Kenji (Univ. de Estudios Extranjeros de Osaka)

18:00~20:00 **Banquete** (Kyoto Garden Palace: <http://www.hotelgp-kyoto.com/>)

22, domingo de octubre: Ponencias

SESION A (9:30~11:00)

A-1 : Lingüística Hispánica : Edificio RINKÔKAN Planta 2, R207

Moderador

<Miyamoto, Masami(Univ. Municipal de Estudios Extranjeros de Kobe)>

- (1) Tabayashi, Yoichi (Doctorando, Universidad Seisen)

"Consideración sobre la estructura conceptual de la negación con EN"

- (2) Kigoshi, Tsutomu (Doctorando, Univ. de Estudios Extranjeros de Tokyo)

"La posición del adjetivo en el sintagma nominal español"

- (3) Kondo, Yuka (Doctoranda, Univ. De Estudios Extranjeros de Osaka)

"Los modos en la cláusula 'cuando'"

A-2 : Cultura Hispánica : Edificio RINKÔKAN Planta 2, R209

Moderador<Furuie, Hisayo(Univ. de Estudios Extranjeros de Kyoto)>

- (1) Takimoto, Kayoko(Universidad Keiô Gijuku): "Del secretario al cronista real: Fernando de Pulgar, oficial real de la Corona de Castilla del siglo XV"

- (2) Fujino, Masako(Universidad de Kyoto Sangyo)

"El rol de los santos, vistos a través de los cuentos españoles"

- (3) Tanabe, Kae (Univ. de Estudios Extranjeros de Osaka): "Repoblación de Toledo por Alfonso VI: Una aproximación al tratamiento de los mozárabes a través de los fueros"

A-3 : Literatura Hispánica : Edificio RINKÔKAN Planta 2, R211

Moderador<Tatebayashi, Ryoichi(Universidad Doshisha)>

- (1) Ota, Seiko (Univ. de estudios Extranjeros de Kyoto): "Impresiones de Tablada sobre Japón en su libro *En el país del sol*: una lectura en po de la constatación de su estancia en Japón"

- (2) Ogusu, Eizo (Univ. prefectural de Shizuoka)

"Pardo Bazán y Clarín: el *incipit* de *La madre Nautraleza* y *La Regenta*"

- (3) Mori, Naoka (Univ. de Estudios Extranjeros de Kyoto)

"*Bodas de sangre*: Federico garcía Lorca y su visión de muerte"

SESION B (11:30~12:30)

B-1 : Lingüística Hispánica · Literatura Hispánica :

Edificio RINKÔKAN Planta 2, R207

Moderador<Arturo Escandón(Universidad Ritsumeikan)>

- (1) Gerardo Villegas Muñoz (Univ. de Estudios Extranjeros de Kansai)

"Los signos paralingüísticos de la comunicación no verbal: estudio de los elementos cuasi-léxicos en la conversación en español de hablantes japoneses"

- (2) Santiago Esparza Celorrio (Univ. de Estudios Extranjeros de Kansai)

"La Literatura Chicana como literatura del tercer milenio"

B-2 : Enseñanza de la lengua española : Edificio RINKÔKAN Planta 2, R209

Moderador

<Nishikawa, Takashi(Univ. Municipal de Estudios Extranjeros de Kobe)>

- (1) Tukahara, Nobuyuki (Univ. prefectural de Aichi): "El uso de la nueva tecnología de comunicación a distancia en la enseñanza del español como lengua extranjera"
- (2) Wasa, Atsuko (Univ. de Estudios Extranjeros de Osaka)
"El aprendizaje del subjuntivo desde el punto de vista cognitivo"

B-3 :Cultura Hispánica : Edificio RINKÔKAN Planta 2, R211

Moderador<Bando, Shoji(Univ. de Estudios Extranjeros de Kyoto)>

- (1) Lluís Valls Campà (Univ. de Estudios Extranjeros de Kyoto)
"Trabajadores Transfronterizos en Galicia y Norte de Portugal"
- (2) Darío González Ramírez (Universidad San Andrés-Momoyama Gakuin)
"Música salonesca del siglo XIX: De la polca europea a la polca amerindica"

SESION C (13:30~14:30)

C-1 :Lingüística Hispánica : Edificio RINKÔKAN Planta 2, R207

Moderador<Yamazaki, Shinzo(Universidad Ritsumeikan)>

- (1) Toyomaru, Atsuko (Doctoranda, Universidad Sofia): "La realización del acento de los adverbios y de las sintagmas nominales -en el caso de su realización con entonación ascendente-"

C-2 :Enseñanza de la lengua española : Edificio RINKÔKAN Planta2, R209

Moderador<Itoigawa, Miki(Univ. prefectural de Aichi)>

- (1) Leticia Vicente Rasoamalala (Univ. prefectural de Aichi)
"Análisis Conversacional de la interacción en el aula como herramienta para el docente de ELE"
- (2) Morimoto, Toshiharu (Universidad Waseda)
"Sobre la capacidad de distinguir entre las tres líquidas españolas de los hablantes japoneses"

日本イスパニヤ学会
2005年度会計報告

2006年3月31日決算

(2005年4月1日～2006年3月31日)

収 入		支 出	
2004年度からの繰越金	4,507,168	学会誌・会報発行経費	1,095,519
当年度会費		51回大会開催費用	202,035
正会員	2,829,000	事務経費	815,767
海外在住会員	27,000	会議開催費用	9,570
賛助会員	167,100	庶務委員経費	60,000
購読会員	27,300	通信・交通費	226,125
過年度分会費	515,000	前年度分経費	4,728
前受会費	42,100	銀行手数料	22,415
寄付	15,000	事務手払い経費	30,000
銀行口座利子	35	理事選挙経費	112,692
		会員名簿作成経費	131,500

収入合計 ￥8,129,703

支出合計 ￥2,710,351

収 支 差 額 ￥5,419,352

会計委員 宮本正美

監査の結果、異常なきものと認めます。

2006年 10月 1日 会計監査委員 寺崎英樹
2006年 10月 7日 会計監査委員 立林良一

2005年度期末残高内訳	
三菱東京 UFJ 銀行普通口座	￥2,629,131
郵便振替口座	￥3,358,880
みずほ銀行普通口座	￥320,010
学会誌代金未払額	￥-888,669
計	￥5,419,352

2006年10月8日

日本イスパニヤ学会 2007年度会計案

収 入

会 費 (8000円×370名)	2,960,000
------------------	-----------

計 2,960,000円

支 出

		2005年度
1. 学会誌・会報発行経費	110万円	1,095,519円
2. 大会開催費用	25万円	202,035円
3. 事務経費 (注1)	100万円	815,767円 (注2)
4. 会議(理事会等)開催費用	3万円	9,570円
5. 庶務委員経費	6万円	60,000円
6. 通信・交通費 (注3)	25万円	226,125円
7. 学会奨励賞 (注4)	15万円	
8. その他	10万円	

計 294万円

収支差額 2万円

注1 (株)ガリレオに業務委託する経費

注2 2005年7月より業務委託開始のため、2005年度金額は9ヶ月分

注3 理事会開催等に伴う庶務委員等の交通費、関連する編集作業および郵送料金、学会事務、その他

注4 2006年度より新設

作成

会計委員 宮本正美

【書評】

アメリコ・カストロ『セルバンテスとスペイン生粋主義
——スペイン史のなかのドン・キホーテ』
(本田誠二訳、法政大学出版局、2006年)

三倉 康博 (東京大学大学院)

Américo Castro, *Cervantes y los casticismos españoles* (初版 1966 年) の邦訳が出版された。カストロの著作が日本語に訳されるのは、初期の代表作 *El pensamiento de Cervantes* (初版 1925 年、同じ訳者により『セルバンテスの思想』として 2004 年邦訳出版) に続き 2 冊目である。

本書は「セルバンテスと新たな視点からみた『ドン・キホーテ』」「スペイン人の過去についての更なる考察」「フライ・バルトロメ・デ・ラス・カサスまたはカサウス」「不安定なスペインとインディアスとの関係」の 4 編からなる論文集であるが、新旧キリスト教徒の「血統」という問題を最重視するスペイン史観から黄金世紀スペイン文化を論じるという方向性が全体に一貫している。4 編のなかで最大の比重を占めるのはセルバンテス論であり、訳者が「あとがき」のなかで的確に指摘しているように (399 頁—403 頁)、『セルバンテスの思想』が汎西欧的な思想・文学潮流のなかにセルバンテスをルネサンス人として位置づけたのに対し、約 40 年後に出版された本書においてカストロは、多数派旧キリスト教徒の生粋主義が支配する特殊スペイン的環境のなかで生きた新キリスト教徒としてセルバンテスを位置づけ、その作品を論じている。

各論考とも、筆者の立脚する視点・論点に揺らぎがないために、主張が明確である。またカストロの文章には、読者を引き込む一種の思想的エネルギーのようなものが充溢しており、訳文もその独特の迫力をよく伝えていると思う。カストロの論述は、文献の客観的な分析から結論を引き出すのではなく、16 世紀の新キリスト教徒知識人に関する所与のテーマにそって強引に文献に意味づけをおこなう場合があり、時として違和感を感じることもあったが (特にラス・カサス論)、本書の中心をなす「セルバンテスと新たな視点からみた『ドン・キホーテ』」は、そのような傾向がみられないうえ、微に入り細をうがったテクニカル分析の鋭さも加わり、説得力のあるすぐれたセルバンテス論となっている。

いずれにせよ、スペインの歴史と文化を考えるさいに「血統」という視点が重要であることは間違いない。そうした視点からのアプローチを突き詰めた本書は、カストロの主張や論理展開をどこまで受け入れるかは別としても、スペイン黄金世紀を論じようとする者にとっては、今日もなお必須の参考文献であろう。それと同時に、アメリコ・カストロは、参照されるべき研究者であるにとどまらず、今後は 20 世紀スペインを代表する歴史家・文学者として、「研究対象」としての重要性も増していくに違いない。そうした二重の意味で、カストロの代表作の一つであるとともに『セルバンテスの思想』とは傾向の異なる本書が日本語で読めることになったのは、まことに喜ばしい。

【書評】

G・カブレラ＝インファンテ『煙に巻かれて』（若島正訳、青土社、2006）

花方 寿行（静岡大学）

今回『煙に巻かれて』の翻訳が、ナボコフの翻訳研究で知られる英米文学者の若島氏によって上梓されたことについて、疑問に思う方もおられるだろう。本書は英語版からの重訳なのか？ ナボコフ同様、母国語と英語を自在に操るカブレラ＝インファンテの場合、自作の「英訳」に自ら積極的に関わり、「スペイン語オリジナル版」とは時として大きく異なる「英語版」を作り出しているのだから、「英語版」からの翻訳がいわゆる「重訳」になるのかという点からして議論の余地が残るのだが、そもそも『煙に巻かれて』の場合には、若島氏が底本としている「英語版」*Holy Smoke* がまずオリジナルとして書かれ、その後「スペイン語版」*Puro humo* が、やはりカブレラ＝インファンテ自身の手によって書かれている。こうした経緯を考慮すれば、カブレラ＝インファンテがオリジナル版を英語で書いた唯一の長編エッセイを若島氏が訳されるのは、至極妥当なことと言えよう。

翻訳の仕上がりもまた、氏ならではの高いレベルである。葉巻に関する蘊蓄が一方の、映画や文学に関するものがもう一方の柱となり、言葉遊びやパロディを駆使しながら、その間を自在に行き来するこの作品を訳すには、膨大な知識が前提として要求される上に、原文の言葉遊びを日本語で再現する必要がある。まず知識の方だが、氏の準備の周到さは、巻末に添えられた付録（原書にはない）に窺うことができる。葉巻用語、映画・文学作品のタイトル一覧が付されているのだが、特にタイトルについては、本文で直接言及されるものだけでなく、言葉遊びやほのめかしで利用されているものまで、リストアップされている。映画タイトルはスペイン語圏では変えられていることがよくあるので、スペイン語版原書を読む際にも、非常に参考になるだろう。

訳文もまた、カブレラ＝インファンテの言葉遊びを、ある時は日本語の洒落に置き換え、そのままでは分かりにくそうなときには一節解説を加え、可能な限りテンポを崩さないように日本語にしている。全編言葉遊びといっても過言でない本書において、この作業がいかに大変なものであったかは察するにあまりあり、若島氏の訳業が高く評価されるべきものであることは間違いない。その上でだが、作者自身が兼ねているのでない限り、原文から完全に離れてしまうことの許されない翻訳者は、最終的には表現の滑らかさを犠牲にしても、伝えられる「内容」を尊重せざるを得ない。この時「内容」に読み応えがあれば、多少文章が読みにくくなっても読者はついてくる。しかし本書は、故国キューバへのオマージュやカストロ政権批判も含んではいるが、葉巻と映画・文学に関する蘊蓄が大半を占める。これらが好きな読者およびカブレラ＝インファンテのファン以外には、500 ページの言葉遊びは、少々かたると感じられるかもしれない。元々重い「内容」を持たず、嵩ははつても煙のように軽く漂い散ってゆく文章として書かれた本なのだが、残念ながらさすがの若島氏にも、そこまでの軽さは再現できなかったのだ。

【書評】

オクタビオ・パス『ソル・フアナ＝イネス・デ・ラ・クルスの生涯——信仰の罫』
(林美智代訳、土曜美術出版社、2006)

中井 博康 (津田塾大学)

オクタビオ・パスの評論の中でも傑作のひとつに数えられ、ソル・フアナ研究における金字塔ともなった、質・量ともに文字通りの大著 *Sor Juana Inés de la Cruz o Las trampas de la fe* がついに翻訳された。発表されるや各方面で大反響を呼び、邦訳の待望久しかった本書が、ともかくも日本語で読めるようになったのは、慶賀すべきことである。

原著（初版は 1982 年）については、既に様々なメディアで数多くの書評がなされ、日本でも早くから野谷文昭先生がその魅力の一端を紹介しているが、あの野谷先生をして、いったい誰が翻訳するのだろうかと言わしめ（『ラテンにキスせよー「南」のリズムを読む』自由国民社、1994）、フワン・ゴイティソロをして、理想の講義と激賞せしめた（*El bosque de las letras*, Alfaguara, 1995）この評論の翻訳は、困難を極めたに疑いなく、随所に訳者の苦労がしのばれる。したがって、以下は、隴を得て蜀を望む言葉としてお読みいただければと思う。

まず、翻訳にあたっては英訳・仏訳・伊訳・独訳などを参照したはずであるから、読みやすい日本語を求めた結果だと考えたいが、全般的にもう少し正確を期した方がよかったのではないか。例えば、聖体劇『神＝ナルキッソス』*El divino Narciso* の一節、<las manos son al torno y están llenas / de jacintos, por gala, / o por indicio de sus graves penas: / que si el jacinto es Ay, entre sus brillos / ostenta tantos Ayes como anillos.> というスペイン語が、「その手のひらを返すと、葦で満たされている／盛装として／あるいは犯した重罪の徴として／葦が「嘆き」ならば、その輝きに／指輪のように多くの「嘆き」を誇っている」(p. 466) となっているが、雅歌やオウィディウスの『変身物語』をふまえて、「(黄金の) 筒のような (美しい) その手には、「ハシント」(と呼ばれるルビー) が飾られています。でも、それはただの飾りではなく、深い苦悩のしるしでもあるのです。というのも、「ハシント」とは、哀しみの花、(深紅のヒヤシンス) でもあるのですから、きらめく宝石の数だけ、哀しみがその指を飾ってもいるのです」と補足しながら訳出する方法もあったと思う。同じく聖体劇の一節<Por las cisternas viejas / bebiendo turbias aguas...> というスペイン語は、「年老いた白鳥に強いられて／濁った水を飲むことになる」(p. 467) と訳されているが、素直に「古い水溜りで」とせず、あえて「年老いた白鳥に強いられて」と訳した意図が私には不明である。ちなみに、この聖体劇は『神聖なるナルシソ』として邦訳されていることを付け加えておく。

また、全訳であるはずの本書が全訳されていないのも残念である。訳者の「あとがき」によれば、翻訳は 1982 年に出た初版ではなく、「1989 年」に出た第 3 版（実際は 1983 年）を底本にしたとあるが、この第 3 版には、ソル・フアナがアントニオ・ヌニェスに宛てた書簡がパスの論考とともに補遺として収録されているはずである。さらにパスはこのソル・フアナ論を全集の第 5 巻として収めるにあたり 1990 年にも筆を加え、1983 年以降の

ソル・フワナ研究を概観しているのだが、その重要性を考えるならば、増補部分も割愛せずに翻訳すべきだっただろう。同じく、他ならぬ邦訳であり、パスの日本文学に対する造詣の深さや関心の強さを考えるならば、原著の索引にある「芭蕉」や「世阿弥」といった項目や、序論で研究史を振り返って述べている<aunque todavía nos falta el previsible estudio de algún erudito japonés>の言葉も、削除すべきではなかっただろう。

他方、この本の影響もあって、この二十年あまりの間に事情は大きく変わってきた。ソル・フワナの作品集のファクシミリ版が出版され、あらたなテキストや書簡の「発見」とその真偽についての論争があり、フェミニズム批評が隆盛を極め、果てはパスのソル・フワナ論を下敷きにした映画や舞台や小説まで生まれた。「あとがき」では、パス以降についてももう少し詳しい解説があってもよかったと思う。

日本語によってこの評論を読み、初めてソル・フワナを知る読者のためにも、せめて未訳部分が訳出され、少しでも改訳される機会のあることを望みたい。

【新刊紹介】

石橋純『太鼓歌に耳をかせ：カリブの港町の「黒人」文化運動とベネズエラ民主政治』
松籟社、2006

上田博人・ルビオ、カルロス編『プエルタ新スペイン語辞典』研究社、2006
オルテガ・イ・ガセット、ホセ

『ライブニッツ哲学序説：その原理観と演繹論の発展』（杉山武訳）、
法政大学出版局、2006

カストロ、アメリコ

『セルバンテスとスペイン生粋主義：スペイン史のなかのドン・キホーテ』
（本田誠二訳）、法政大学出版局、2006

カブレラ・インファンテ、ギジェルモ『煙に巻かれて』（若島正訳）、青土社、2006
ガルシア・マルケス、ガブリエル『コレラの時代の愛』（木村榮一訳）、新潮社、2006
ガルシア・マルケス、ガブリエル『わが悲しき娼婦たちの思い出』（木村榮一訳）、
新潮社、2006

グティエーレス・モリーナ、ホセ・ルイス

『忘れさせられたアンダルシア：あるアナキストの生と死』（渡辺雅哉訳）、
皓星社、2005

酒井優子『4次元認識の文構造：スペイン語の場合』リーベル出版、2006

サマセット・モーム、ウィリアム

『ドン・フェルナンドの酒場で：サマセット・モームのスペイン歴史物語』
（増田義郎訳）、原書房、2006

ジンマーマン、ミシェル他『カタルーニャの歴史と文化』（田澤耕訳）、白水社、2006
『スペイン現代詩』（清水憲男編訳）、上智大学イスパニア研究センター、2006

関哲行『スペイン巡礼史：「地の果ての聖地」を辿る』講談社、2006

ダリオ、ルベン『青…』（渡邊尚人訳）、文芸社、2005

チャベス、ウーゴ&アレイダ・ゲバラ

『チャベス：ラテンアメリカは世界を変える！』（伊高浩昭訳）、作品社、2006
中央大学人文科学研究所編『続 剣と愛と』中央大学出版部、2006
トーマス、ヒュー『黄金の川：スペイン帝国の興隆』

（本巻・別巻、岡部広治監訳、林大訳）、大月書店、2006

ドミンゲス・オルティス、アントニオ『スペイン 三千年の歴史』（立石博高訳）、
昭和堂、2006

ドルフマン、アリエル『ピノチェト將軍の信じがたく終わりなき裁判：

もうひとつの9・11を凝視する』（宮下嶺夫訳）、現代企画室、2006

三好準之助『概説アメリカ・スペイン語』大学書林、2006

メノカル、マリア・ロサ

『寛容の文化：ムスリム人、ユダヤ人、キリスト教徒の中世スペイン』（足立孝訳）、
名古屋大学出版会、2005

モンテロッソ、アウグスト『黒い羊他』（服部綾乃・石川隆介訳）、書肆山田、2006

パス、オクタビオ『ソル・フアナ＝イネス・デ・ラ・クルスの生涯：信仰の毘』

（林美智代訳）、土曜美術出版社、2006

ブラサ、ホセ・マリア『ぼくのドン・キホーテ』（鈴木正士訳）、行路社、2006

ブニユエル、ルイス『ルイス・ブニユエル著作集成』（杉浦勉訳）、思潮社、2006

ベーガ、インカ・ガルシラーソ・デ・ラ

『インカ皇統記』（全4冊、牛島信明訳）、岩波文庫、2006

ボニージャ、フアン『パズルの迷宮』（碓順治監訳、沢村凜、I T T訳）、朝日出版社、2005

ボルヘス、ホルヘ・ルイス『闇を讀えて』（斎藤幸男訳）、水声社、2006

リャマサーレス、フリオ『黄色い雨』（木村榮一訳）、ソニー・マガジズ、2005

リンド、エリビラ『あわれなマノリート』（とどろきしずか訳）、小学館、2006

ルイス・サフォン、カルロス『風の影』上下（木村裕美訳）、集英社文庫、2006

レオン、シエサ・デ『インカ帝国史』（増田義郎訳）、岩波文庫、2006

山田信彦編著『スペイン語法律用語辞典』信山社、2006

『より良いスペイン語教育をめざして』神戸市外国語大学外国学研究所、2006

【原稿募集】

本誌『会報』の原稿を募集しています。特に分野は問いません。下記のような項目など、スペイン語圏に関する原稿をどしどしお寄せください。

- ◇ 国内外の学会の案内と報告
- ◇ 国内の学術講演会・行事の案内と報告
- ◇ スペイン語圏に関する新刊書（和書・洋書）の紹介
- ◇ その他

（使用言語：日本語もしくはスペイン語）

（原稿分量：原稿用紙四百字詰 1000～1400 字）

【編集後記】

山崎信三理事から『会報』編集の仕事を引き継ぎました。ひとえに私の怠慢と不慣れのゆえに、『会報 11 号』をお届けするのがすっかり遅くなってしまいました。前号の発行が 2005 年の末ですから、1 年以上間が空いてしまったことになります。長らくお待たせしたこと、深くお詫び申し上げます。来年度は手際よく作業を進め、何とか 2 号発行したいと考えています。ぜひ原稿やご意見をお寄せください。ご多忙中にもかかわらず、素晴らしい原稿をご執筆くださった先生方、協力してくださった理事の皆さま、庶務委員の方々に心より感謝いたします。

この『会報』の校正作業が進む中、残念なお知らせが入ってきました。本学会の会長も務められた元東京外国語大学教授の長南実先生が、今年の元旦にお亡くなりになったとのことです。個人的にも一方ならずお世話になった先生であり、淋しい気持ちでいっぱいです。

（竹村文彦）